第38回江の島寒中神興練成会

新成人の門出を祝う

神奈川県藤沢市

1月20日、神奈川県藤沢市の片瀬海岸東浜で、新成人の門出と無病息災を祈る第38回江の島寒中神興練成会が藤沢鎌倉神興連合会（小室正昭会長）の主催で開催され、約3000人が新成人を祝福した。2020年東京五輪のセーリング競技会場に決まった江の島の上空に鎌倉櫻咲く会（月居茂会長）による16台の和太鼓演奏が響き渡った。

新成人を載せて海上渡御する四基の神輿＝1月20日、藤沢市の片瀬海岸東浜

11時、片瀬海岸東浜で、杉本直大・江島神社権禰宜を斎主に、新成人15人を迎えての式典が来賓参列のもと斎行された。連合会を代表して鈴木順三氏が開会の辞を述べ、国歌斉唱が続き祭事が始まった。最初に修祓、大祓詞が奏上され全員が低頭して祓いを受けた。降神の儀、献饌と続き、祝詞が奏上され、藤沢鳳龍会、藤沢伊勢睦会、片瀬諏訪睦、腰越小動会の4基の神輿が清め

鎌倉櫻咲く会、和太鼓の演奏

られた。

玉串奉奠に移り、斎主、鈴木氏、成人男子代表、成人女子代表がそれぞれ玉串を奉って拝礼し、次に、鈴木恒夫藤沢市長、松尾崇鎌倉市長、星野剛士衆議院議員をはじめ、県会議員、市会議員、観光協会会長、近隣神社責任役員らが玉串を捧げ、拝礼した。撤饌、昇神の儀をもって式典は滞りなく修められた。

式典の後、斎主の杉本権禰宜は「成人となった皆さん、おめでとう。二十歳になり、大人の仲間入りをすると、いろいろなことが許される反面、許されないこともある。責任ある行動をとり、人生の目標をもち、それに向けて邁進してもらいたい。皆さんの活躍を祈る」と祝いの言葉を贈った。

鈴木市長は「新春恒例の寒中神興練成会は藤沢市の冬の風物詩で、湘南の元気都市を皆さんとつくっていこうと思う。今日の太陽のように元気いっぱい頑張ってほしい」と祝辞を述べ、松尾市長は「これからの時代を切り開いて行く皆さんには、様々なことに挑戦しながら、しっかりと新しい未来を築いてもらいたい。皆さんの活躍を心より祈念する」と期待の言葉を贈った。星野議員は「今年は改元の年で、新しい時代の幕開けとなる年に成人になった皆さんに心からエールを贈りたい」と激励した。

来賓あいさつの後、威勢のいい神輿の担ぎ手300人が、掛け声を上げながら新成人を神輿の担ぎ棒に乗せ、大勢の参拝者が見守る中、海上渡御に入った。神輿の上の新成人たちと下の担ぎ手が共に掛け声を掛け合いながら海の中へ進んだ。海上渡御を終えた担ぎ手たちは、同連合会が作った豚汁と焚き火で冷えた体を温めた。豚汁は参拝者全員にも振舞われ新成人を祝っていた。

神輿を担いだ男性は「知りあいが寒中神興練成会に成人として参加しているので、今回は力が入った。毎年誇りをもってさせてもらっている」と笑顔で感想を述べていた。米国から来た男性は「非常に興味深い。もっとどういう意味があるのか知りたい。今日はたまたま見ることができ、大変ラッキーだ」と語った。鎌倉櫻咲く会の月居会長は「新年の禊のために、1年間練習し、毎年誇りをもって活動している。人がまばらな時から人集め、露払いのために演奏を始めている」と和太鼓演奏に対する意気込みを熱心に語っていた。

最後に鎌倉櫻咲く会の「炎（かがろい）」の演奏ですべてのプログラムが終了した。

師岡熊野神社で御筒粥神事

穏やかで平和な年に

横浜市港北区

年占をする石川正人宮司と氏子総代＝1月14日、横浜市港北区の師岡熊野神社

雲一つない快晴の1月14日、横浜市港北区の師岡熊野神社（石川正人宮司）で第1070回「御筒粥神事」が行われた。天暦3年（949）から今日まで続いている「筒粥の神事」は日本全国でも稀な古神事で、今日では横浜市より無形文化財に指定されている。

筒粥はその年の吉凶を占う年占（としうら）で、葭を用いるのは、この植物が「よし」とも「あし」とも呼ばれ、物事の「良・悪」の両方に通じることから農作物の「吉・凶」を決める占いである筒粥の筒に相応しいと考えられたから。筒は27本あり、農作物23種と農作物の出来を左右する日・雨・風と世の中を、氏子総代立会いのもと、引き上げられた葭の筒を一本ずつ割って、その中に粥がどの位入っているかで吉凶を占うもの。

午後2時、太鼓の音の後に笛が続き、神事の始まりを告げる。本殿の横に多くの参列者が集まる中、手水の儀を終えた宮司、祭員が参進、修祓の儀が行われた。宮司一拝、続いて献饌の儀、宮司が大祓詞を奏上し、続いて祝詞を奏上した。その後宮司が玉串を奉って拝礼し、総代会会長、師岡連合町内会会長、氏子会会長、鈴木馨祐衆議院議員、嶋村公俊県議員、武田翔県会議員が続いて玉串を奉奠した。次に撤饌の儀、宮司が一拝した。そして宮司が九の字を切り、葭を引き上げた。

本殿に移り、殿内で宮司と総代の審議により、年占いが開始され、参列者たちが見守る中、項目四つずつ占いの結果が発表されていった。「大麦半分、小麦半分、早稲七分、中手三分」と宮司の大きな声で発表され、それを参列者全員が用意された紙に記録した。最後の「世の中」が「八分」と大声で発表された時、会場ではホッとした安堵のどよめきが起こった。

最後に宮司が次のように挨拶した。

「今年の作物は中手が三分、奥手が半分で、お米の出来が心配だ。豆類と菜っ葉類はよく出来そうだが、芋と茶の出来が悪いということ。日、雨、風共に半分で、大きな台風は来ないとは思うが、作物の出来に影響するので、もっと日が欲しい。世の中は八分で安心できる。今年は御代替わりの年で、5月1日から新しい時代になる。4月には統一地方選挙、夏には参議院選挙があり、結果次第で世の中が動くだろうが、八分なので良い方向に行くと思う。御代替わりの年が穏やかで平和な年であってほしいと願う」

参列者は本殿の外に出て、お粥を食べながら無病息災を祈った。近くに住んでいるという男性は「娘が小学校で筒粥神事のことを聞いたので娘と一緒に初めて来た。とても厳かで良かった。子供の健康と無病息災を願う」と語り、同じく近くに住んでいる女性は「家を建てるときからの縁で、いつもここにお参りに来ている。無病息災のお粥をいただき、大変ありがたい」と話していた。

師岡熊野神社は聖武天皇神亀元甲子年（724）に全寿仙人によって開かれ、熊野山の中腹に鎮座し、和歌山県熊野三社（本宮・那智・速玉）の祭神と一体。仁和元年（885）7月に、光孝天皇の勅使六条中納言藤原有房が下向し、「関東随一大霊験所熊野宮」の勅額を賜った。それ以来、宇多・醍醐・朱雀・村上天皇の勅願所として社僧17坊が附せられた。

観応2年（1351）6月17日、雷火のため社殿は焼失したが、御神体・社宝は無事で、貞治3年（1364）の熊野山縁起は神社の故事を伝えている。

境内の「の」の池は同社の草創の地で、禅定水と呼ばれ、どんな干天でも涸れることがなく、また大雨でも水が溢れることもないとされる。南北朝期の落雷による火災で、社殿が焼失した時、神宝・神体をこの池に投げ入れ焼失を免れたと伝わる。「筒粥神事」はこの池の水を使う。

岡山宗教散歩〔3〕

郷土史研究家　山田良三

法然③

法然の漆間家と一族の立石家

誕生寺の本堂の後ろ、来て椋の木の梢にかかり、天の奇瑞が現れたそうで、この木は「両幡の椋木」と名付けられました。元の木は朽ち、現在の木はその後植えられたものです。

誕生寺のイチョウの大木「公孫樹」

二流れの白幡の奇瑞は、二流れの白幡が流れ、一つの幡が下ったことと同じ深い意味があると、「法然上人行状絵図」などには記されています。元中外日報記者の山田繁夫氏は著書『法然と秦氏』で、「二流れの幡の奇瑞は、伝わります。この伝承について山田氏は、柳田国男が『論考　片目の魚』で、「片眼の魚にまつわる伝承とたたら鍛冶には深い繋がりがある」としたことから、漆間氏も秦氏など渡来系鍛冶集団との関りがあったのではないかと記しています。かつて中国山地一帯にはたたら鍛冶集団が数多くいて、誕生寺のある久米南町周辺にも多くの鉄滓が残っています。

漆間家は美作国一宮の大庄屋を務めた立石家と養子として入りました。同族です。美作国一宮は津山市一宮の高野神社のあるところで、立石家は豪族で美作の高野神社の神職も務めていました。立石家の本姓は漆島で、宇佐八幡宮の社家であった宇島一族の漆島元邦が封戸郡の立石に居住して立石を名乗り、延喜年間に美作に来住したと伝えられています。立石元邦の長男盛国が二宮の立石家を相続し、次男の盛栄が漆間を名乗って稲岡に居住し、その五代目時国の息子が法然です。

津山に来た内村鑑三が「法然に学びなさい！」と語ったことは既述しましたが、内村を津山に招いた森本慶三に協力したのが立石家の有力者・立石岐（ちまた）です。立石岐は32歳で二宮村長になると、殖産興業と民権拡張のため同志と共に、地域産業の振興や自由民権運動に活躍します。養蚕・製糸業を振興し、大正15年には郡是蚕糸・津山分工場を設立しました。鉄道事業にも取り組み、「中国鉄道」の創立に加わり、岡山～津山の鉄道（現JR津山線）建設に貢献しました。作美線（現JR姫新線）建設に際しては自宅の土地を提供していました。JR津山線は今年で開通120年を迎え、今でも重要な交通手段として地元に愛されています。

岐は同志と「美作自由党」を結成し、板垣退助とも連携して議会開設運動を行い、第1回衆議院選挙に立候補し当選、政治家として活躍します。また、津山女学校や二宮小学校の設立には私有地を提供しています。

晩年、森本慶三を支援した岐はキリスト教に改宗し、津山基督教会や森本の教育・福祉事業に協力を惜しみませんでした。津山基督教図書館の設立にも貢献し、津山を訪れた内村鑑三を誕生寺に案内しています。立石家はもともと浄土宗で、一族にはキリスト教への改宗に反対する人もいましたが、「自分の改宗は、他力本願を説く法然の志を継ぐものである」と信念を貫き、キリスト教の布教にも努めました。

内村鑑三が法然をルターのような改革者として高く評価した背景には、立石岐の存在も否定できません。

ちなみに浄土宗の宗紋の香葉は、漆間家の家紋から来ており、立石家の家紋も、立石家が代々社職を務めてきた美作一宮高野神社の社紋も香葉です。このことからも法然と秦氏の立石家との密接な関係を知ることができます。

南島原市の原城跡を訪ねて

島原・天草の乱の舞台

昨年6月、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界遺産登録が決まった。長崎県と熊本県にわたる12の構成資産の最初に挙げられたのが島原半島南東部（長崎県南島原市）にある「島原・天草の乱」の舞台「原城跡」。その説明には、幕府の海禁体制を確立して宣教師潜入の機会をなくし、「宣教師不在のもと、潜伏キリシタンが長期間にわたって自らの信仰を秘かに継続する重要な契機となった」とある。

海から見た原城跡

原城は、明応5年（1496）、有馬貴純により、有明海に張り出した丘陵に、日野江城（南島原市のほぼ中央）の支城として築かれた。有馬氏が日向国延岡城に転封になった後、元和2年（1616）に日野江城に入城した松倉重政が、不便な日野江城を放棄して島原城（島原市、有明海を臨む雲仙岳の麓）を築城したため、原城も廃棄された。

ここに一揆を起こしたキリシタンや農民が、海を隔てて至近にある天草の一揆群衆と合流し、当時16歳の少年天草四郎を総大将に立て籠もったのが寛永14年（1637）12月。約3カ月に及ぶ籠城戦の末、内通者1人を除く老若男女3万7000人全員が死亡したという。日本のキリシタン迫害史の中で最も悲惨な戦であった。

記者が原城跡を訪れたのは昨年9月。テント張りの土産物屋が立ち、女性2人が特産のミカンや手延べそうめんなどを売っていた。周囲は畑ばかりだが、駐車場も整備され、世界遺産になってから観光客が増えたという。有明海の青と草原の緑が印象的で、まだつぼみの彼岸花の赤色が、一面の緑の中に目立っていた。

案内してくれたのは南島原市に住んでいる郷土史家の宮本次人氏で、「原城は海から見ると構えがよく分かります」と言って、海べりに降りて説明してくれた。3月に行った天草は目の前で、伝馬船でも簡単に渡れそう。幕府軍の中にも地形を心得た大名がいて、海から原城を攻撃したという。

「築城などで過酷な年貢の取り立てに苦しんだ農民の一揆と、信仰を守るためのキリシタンの戦いの両面があったとされるが」と聞くと、発掘すると遺体近くから鉄砲玉を溶かして作られた粗末なクルスやメダイ、ロザリオが見つかることが多いことから、「信仰のための戦という意味合いが強いと思う」との答えだった。

天草四郎の像

頭から足まで完全に揃った骨はほとんどなく、ばらばらの状態で発掘されるという。キリシタンは死後も蘇ってくるという恐怖心を、幕府軍は持っていたのだろうか。発掘が物語るのは、悲惨な戦闘とその後の遺体の扱いである。

原城跡を歩くと、天草四郎の墓碑に新しい花が手向けられていた。訪れる人が絶えないのだろう。その横に立つ白い天草四郎の像は、長崎平和祈念像で知られる彫刻家・北村西望（せいぼう）の作。そう言えば、西望は南島原市の生まれだった。

そこから車で20分ほど北に走ると、島原城の城内に北村西望記念館があり、平和祈念像の原型になった作品が展示されている。

島原・天草の乱後、島原藩主の松倉勝家は、一揆を招いた責任を問われて改易され、後に斬首された。江戸時代に大名が斬首されたのはこれだけ。旧来の住民はほとんどいなくなったので、代わって藩を統治した高力忠房は他藩からの移住政策を進めた。

この移住に応じた地域の一つに讃岐の小豆島がある。小西行長が統治していた時代に約4000人もが洗礼を受けていたことからか、多くの島民が島原に移住し、今も親戚付き合いの続いている家があるという。

一方、天草は幕府直轄領となり、鈴木正三（しょうさん）の弟・鈴木重成が初代代官に就任した。禅ならキリシタンの信仰に対抗できると考えた重成は、曹洞宗の僧だった兄を天草に招き、住民の教化に努めた。また重成は天草の検地をやり直し、石高の算定を半分の2万1000石にするよう幕府に訴えたが、前例がないとして拒絶されたため、抗議の切腹をした。

これに驚愕した幕府は、重成の死を病死と発表し、正三の子重辰を養子にして2代目の代官とし、石高を半減した。これを知った天草の領民は号泣したという。現在、富岡城跡は観光客向けに「熊本県富岡ビジターセンター・富岡城」として整備され、城内に鈴木重成と鈴木正三の像が立っている。（多田則明）

「HOKUSAI UPDATED」

森アーツセンターギャラリー

美術

生涯の作品を網羅「新・北斎展」

葛飾北斎（1760―1849）は世界で最も知られた日本の芸術家の一人。代表作として「冨嶽三十六景」シリーズ、19世紀のヨーロッパにおけるジャポニスムの流行の契機となった『北斎漫画』などが一般に知られているが、これらは約70年に及ぶ北斎の画業の一端に過ぎない。

今回の展覧会ではその北斎の20歳のデビュー作から90歳の絶筆までの作品が出品され、その数は約480件（会期中展示替えあり）に上り、大規模かつ網羅的な北斎展となる。同展では北斎の絵師人生を作風の変遷と主に用いた画号によって6期に分けて紹介している。

勝川派の絵師として活動した春朗期（20～35歳頃）、勝川派を離れて肉筆画や狂歌絵本の挿絵といった新たな分野に意欲的に取り組んだ宗理期（36～46歳頃）、読本の挿絵に傾注した葛飾北斎期（46～50歳頃）、多彩な絵手本を手掛けた戴斗期（51～60歳頃）、錦絵の揃物（そろいもの）を多く制作した為一期（61～75歳頃）、自由な発想と表現による肉筆画に専念した画狂老人卍期（75～90歳頃）と、近年発見された作品、初公開作品を合わせて、北斎の壮大な画業を通して見ることができる。

葛飾北斎《円窓の美人図》絹本額面　文化2年（1805）頃　シンシナティ美術館　Cincinnati Art Museum, The Thomas Collection-Given by Mrs. Murat H. Davidson in honor of her grandfather Joseph C. Thoms, 1982.4 通期展示

江戸時代後半に浮世絵師として登場してから90歳で没するまでの約70年に及んだ北斎の画業は、常に新たな絵画の創造への挑戦の連続だった。度重なる画号の改名は有名だが、画風もまた大胆に変え続けた。北斎は人生を通して自らを進化させていったと言える。

北斎の研究者、永田生慈氏は不断の調査研究と新たな作品の発掘によって北斎像のUPDATEに生涯をささげた。この新・北斎展はその集大成として、永田氏によって企画されたもの。展示された作品の多くは永田氏が北斎研究の為、私財を投じて収集した「永田コレクション」から出品されている。

会期は1月17日（木）から3月24日（日）まで（会期中、展示替えあり）。

開館は午前10時から午後8時まで（火曜のみ午後5時まで、入館は閉館の30分前迄）。休館日は2月19日（火）・20日（水）、3月5日（火）。森アーツセンターギャラリーは六本木ヒルズ森タワー52階にある。お問い合わせはハローダイヤル03（5777）8600。

読者プレゼント

抽選で5組10名様を招待

はがきに、郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記の上、次の宛先に2月20日（当日の消印有効）までにお送り下さい。抽選で5組10様に「新・北斎展」の招待券をプレゼント。当選者の発表は招待券の発送をもって代えさせていただきます。

宛先：〒160―0022東京都新宿区新宿5―13―2　4F　宗教新聞社「読者プレゼント」係